

# イデオロギー的動物としての人間

—アルチュセールのイデオロギー論のもうひとつの意味—

馬 渕 浩 二

## 目次

- 一 アルチュセールによるイデオロギー論の社会構造論的再構築
  - 二 イデオロギーによる媒介の不可避性
  - 三 他者のイデオロギーによる媒介
- 結 語

## 序

かつてアルチュセールは、「人間は本性的にイデオロギー的動物である<sup>(1)</sup>」というテーゼを提示した。このテーゼが「人間は道具をつくる動物である」、「人間はことばを話す動物である」等々の命題を意識して書かれたものであることは明らかである。これらの命題は他の動物との種差を通じて人間を定義しようとするものだから、アルチュセールのテーゼも同様に人間と動物とを分かち種差の位置にイデオロギーを置いておくと解釈しなければならぬ。イデオロギーの概念史のなかでさまざまな規定がイデオロギーに与えられてきたが、おそらくアルチュセールの規定はもつとも強い<sup>(2)</sup>。

アルチュセールのイデオロギー論が果たした最大の貢献は、イデオロギーを土台としての経済の鏡と見なすだけのイデオロギーの反映論を回避し、経済へと還元することが不可能であるような固有の存在領域と機能をイデオロギーに与えた点にあると言われる。つまり、まずはアルチュセールのイデオロギー論は社会構造的な文脈で評価されている。しかし、すでに述べたように、アルチュセールのイデオロギー論は人間が人間であるための条件としてイデオロギーを位置づけ、人間にイデオロギーのなかで生きることと運命づけるという特異な側面も持っている。したがって、アルチュセールが語ったイデオロギー論は、社会構造的な解釈にたいしてのみならず、同時にいわば〈人間論的〉解釈にたいしても開かれている。本稿が試みるのは、イデオロギーのなかで生きることが運命づけられた人間に定位する人間論的なパースペクティブからアルチュセールのイデオロギー論を読み直すことである。

## 一 アルチュセールによるイデオロギー論の社会構造論的再構築

アルチュセールのイデオロギー論を人間論的に読み直すことの特殊性を理解するためにも、まずはアルチュセールのイデオロギー論の社会構造論的な側面を確認しておく必要がある。したがって、アルチュセールがどのようにイデオロギー論を再構築しようとしたのかを振り返ることから始めなければならない。

アルチュセールが批判の対象としたのは、土台／上部構造という古典的な図式によつてイデオロギー現象を説明しようとする経済主義である。たしかに、イデオロギー論を再構築するために経済主義を退けようとしたアルチュセールもこの図式を用いるが、しかしその際に経済主義とは別の枠組みが前提されていることは言うまでもない。経済主義は土台による上部構造の単純で一方的な決定関係を想定するのにはたいして、アルチュセールは両者のあいだに別の関係を見出そうとするのである。

アルチュセールによれば、唯物論的に見える経済主義もまた一種の転倒した「ヘーゲル主義」であるにすぎない。なぜなら、それはヘーゲル的な問題構制のなかに存在する二つの用語の関係を転倒しているにすぎないからである。古典的マルクス主義的な仕方ではヘーゲルの社会観を図式化すると、ヘーゲルにおいては経済的なもの（市民社会）の本質・真理が政治的なもの（イデオロギー的なもの（国家）である）と見なされるが、経済主義においては政治的イデオロギー的なもの本質・真理は経済的なものだとすることになる。たしかに両者の関係は転倒されているが、両者を支えている構図は不変である。つまり、一方の契機が単一の原理として持ち出され、他方の契機はその現象の位置に据えられるのである。「現象—本質—……の真理<sup>3)</sup>」という説明様式がヘーゲル主義においても経済主義においても保持されていると、アルチュセールは考える。だから、経済主義においては、本質にたいする現象の関係が土台と上部構造の関係として維持されているのである。

これにたいして、アルチュセールにとっては、土台と上部構造の関係はそうした本質―現象の関係ではありえない。アルチュセールは言う。「一方では(経済的)生産様式による最終審級における決定があり、他方では上部構造の相対的自律性とその独自の有効性(efficacia)がある」<sup>(4)</sup>。これが土台と上部構造の関係である。諸々の上部構造が土台にたいして相対的な自律性と有効性を持つという関係は、土台による一方的な決定という経済主義的な関係とは異なった関係である。経済主義的に考えれば、土台、上部構造の諸審級からなる社会的全体性は、上部構造が土台によって一方的に決定される関係によって特徴づけられる。つまり、それらの諸要素を支配している関係は、単一の原理とその表現の関係、本質と現象の関係であって、これらの諸要素を統一する全体性は単一の原理を表現するにすぎない。このタイプの全体性には「表出的全体性(totale expressive)」という名が与えられる。表出的全体性は、全体の諸部分のどれを取り出しても、それが単一の本質を表現するような全体性である。経済主義がもたらす社会的全体性もこの種のものであって、この本質に相当するのが経済なのである。それゆえに、経済主義においては、社会の諸部分が固有の効力をもって作用するとは見なされないであり、それらは複雑さの見掛けのもとで本質としての経済だけを表現するにすぎない。

だが、アルチュセールにとっては、社会的全体性は「複合的全体性(totale complexe)」である。この全体性の統一性は、「区別された、『相対的に自律的な』レヴェルないし審級を含むのであって、これらのレヴェルや審級は複合的構造的統一のなかで共存し、特殊な決定様式に応じて相互に分節結合し(articuler)、最終審級においては経済のレヴェルないし審級によって確定される」<sup>(5)</sup>。相対的に自律した諸審級が分節結合するような全体性においては、ある審級を単独でとりだして考察することは不可能である。それは経済に関しても同じである。ちなみに、最終審級における経済による確定・決定という表現は、社会的全体の諸審級のなかでどれが支配的になるかを決定するのが経済という審級であるという意味であって、経済の運動だけが一切を決定するということではない。したがって、経済の決定は承認されるにしても、そのあり方は経済主義的なそれとは別様に論じられる。「経済的な弁証

法はけっして純粹状態で作用するものではない：〔中略〕：最初の瞬間にせよ、最後の瞬間にせよ、『最終審級』という孤独な時の鐘がなることはけっしてない<sup>(6)</sup>。経済が他の審級、つまりイデオロギー的審級や法的審級の介在なしに純粹に作用することはありえないのである。このことは以下のようにもっと強く主張される。「……生産関係は、それが呼び込む上部構造的諸形態を自分自身の存在条件として指し示す。だから、独自の上部構造を捨象してしまえば、生産関係を概念をもって考えることができなくなる<sup>(7)</sup>」。イデオロギーもその一部である上部構造は、土台としての経済の存在と作動を可能にする条件なのであり、経済から派生したり、経済によって一方的に決定されたりするものではなく、相対的な自律性と固有の効力をもっているのである。

このことをつぎのように言い換えることができる。「イデオロギーはそれだからそのままあらゆる社会的全体性の有機的な一部分となつてゐる。あたかも人間社会というものは、イデオロギーというこの種差別的な構成体、この表象体系（様々の水準における）がなければ存在し得ないかのように、一切が進行する。いわば、人間社会は、歴史上その生命活動に不可欠でさえある基本要素として、その呼吸作用に不可欠でさえある空気として、イデオロギーを排出する<sup>(8)</sup>」。イデオロギーは社会の固有の審級として社会の有機的な一部分なのであり、それがなければ社会が社会として成立しえないような社会の不可欠の要素である。したがって、アルチュセールにとってイデオロギーは『歴史』の異常な逸脱や偶然でできた突起物のごときものではない。それは社会の歴史的な生命活動に本質的な一つの構造である<sup>(9)</sup>。そうである以上、イデオロギーを社会にとつて非本質的なものとして廃棄することはできないわけであり、このことを論理的に徹底すれば、イデオロギーのない社会を想定することはできないという主張に辿りつく。未来の社会がいかなる形態を取ろうとも、イデオロギーは社会の本質的な契機としてつねに存在するだろう。こうして、「イデオロギーは永遠である<sup>(10)</sup>」というアルチュセールのもう一つの理論的主張が導かれることになる。

## 二 イデオロギーによる媒介の不可避性

しかし、なぜそのような断言が可能なのだろうか。つまり、イデオロギーはなぜそのように存在すると言えるのだろうか。このイデオロギーの根拠への問いについて、アルチュセールは二つの視点から答えている。一つは、いかなる社会にも妥当するイデオロギーの有り様に注目する歴史貫通的な視点である。もう一つは、歴史のある段階にある社会に妥当するイデオロギーの有り様に注目する歴史的な視点である。本節では第一の視点を中心に考察するが、ここでは、二つの視点を同時に提示した重要なテキストを紹介することにした（一九六五年四月のタイプ原稿「理論・理論的実践・理論的形成」）。

階級社会においては、イデオロギーは現実的なものの表象であるが、しかし必然的に歪曲している。なぜなら、必然的に偏っており (biased)、偏向している (tendentious) からである——偏向しているのは、イデオロギーの目的が人間たちに彼らが生活する社会体系の客観的認識を与えることではなく、反対に、階級搾取の体系における彼らの「場所」に彼らを保っておくために、この社会体系の神秘化された表象を与えるためである。もちろん、階級なき社会におけるイデオロギーの機能の問題を提起する必要もある——そして、その問題は以下のことを示すことによつて解決されるだろう。つまり、イデオロギーの変形作用 (deformation) は、社会的全体そのものの本性の機能として社会的に必然的である。この機能は（もっと正確にいえば）社会的全体のその構造による決定の機能である。この機能が、構造——社会的全体としての——を、この構造によつて決定された社会のうちにその場所を占める諸個人にたいして不透明 (opaque) にする。社会構造の不透明性が、社会的凝集 (cohesion) に不可欠なかの世界の表象を神秘的にする。階級社会ではイデオロギーのこの第

一の機能が残っているが、しかし階級分割の存在によって課された新しい社会的機能によって支配されているのであって、この階級分割が、イデオロギーの前者の〔第一の〕機能にたいして新しい機能を優位にしている。<sup>(11)</sup>

ちなみに、このテキストでは変形作用、歪曲、神秘化という言葉が使用されているが、それらはイデオロギーの問題系の一端を形作る〈イデオロギーと虚偽の問題〉<sup>(12)</sup>に関わるものである。

さて、ここではイデオロギーの歪曲や神秘化が二重に話題となっている。イデオロギーの第一の機能と呼ばれるのは、階級社会にも階級なき社会にも通底する機能であり、社会の不透明性が社会の表象を神秘的にすることを指す。これを〈歴史貫通的〉と形容することにしてしよう。他方、新しい機能は階級社会において見出される機能であり、テキストの冒頭で述べられているように、搾取や不正を隠蔽するために社会の表象を神秘化する機能のことである。これについては〈歴史的〉と形容することにしてしよう。したがって、階級社会においてはイデオロギーの二重の作用が働くことになる。つまり、「社会のその構造による決定の不透明性」<sup>(13)</sup>という歴史貫通的な作用と、階級分割の存在による不透明性という歴史的な作用である。第二の機能については次節で扱うことにする。

社会の不透明性がイデオロギーの根拠であるとする第一の視点について理解するために、空間的な表象を用いることにしよう。この場合、イデオロギーは移ろい行く複雑な社会構造とそのなかに住まう人間とのあいだにあって、両者を媒介するものとして描くことが可能である。イデオロギーの作用をこのように敷衍するとき、アルチュセールのイデオロギー概念とリップマンの「擬似環境」(pseudo-environment) という概念との類似性が浮かび上がる。リップマンによれば、人間と実在の環境のあいだには、実在の環境に関するイメージとしての擬似環境が媒介者として存在する。というのも、「真の環境があまりに大きく、あまりに複雑で、あまりに移ろいやすい」<sup>(14)</sup>がため、人間は単純化・安定化されたイメージとして擬似環境を必要とするからである。社会もこの種の環境であると

考えるとすれば、社会があまりに複雑であるがゆえにその不透明性が生み出されるのであり、そのため社会全体を一挙に把握することが原理的に不可能となる。それゆえ、旅における地図と同じように、イデオロギーは複雑な社会構造から与えられる情報を省略、強調、単純化することでそれを再構成し、人間に特定の遠近法を与えることによつて、人間が社会と関係することを可能にするのである。

そして、人間と社会を関係づける機能は、社会構造という複雑で不透明な環境のなかで、人間たちにその位置や役割を確認させ担わせる機能に帰結する。「……イデオロギー（大衆の表象としての）は、人間を形成し、変化させ、その存在条件の要求に呼応できるようにさせるためには、どんな社会にも不可欠なのである」<sup>(15)</sup>。「理論・理論的実践・理論的構成」においては、以下のように言われる。「階級社会においてと同様、階級なき社会においても、イデオロギーは人々の存在の諸形態の全体における彼らのあいだの紐帯を保証し、社会構造によつて割り当てられた仕事に対する諸個人の関係を保証するという機能を持つ」<sup>(16)</sup>。

イデオロギーに関するこうした説明が社会構造的な視点だけからなされているのではないことは、すでに明らかであろう。このような説明様式にたいして〈人間論的〉という名を与えるとすれば、へどのような社会であれイデオロギーという固有の層が存在する〉という社会構造的説明は、〈人間はつねにイデオロギー的に汚染されている〉という人間論的説明に変換することが可能なのである。

しかし、汚染という表現には注意が必要である。汚染という言葉は、はじめに汚染されていない何かがあり、そのあとで汚染が始まるというイメージ、つまり純粹さ・透明さが本来的であり、汚れ・不透明さは二次的で派生的であるというイメージを生み出してしまふからである。このイメージを回避するために、たとえばイデオロギーの作用を光の作用との類比で考えてみたい。もちろん、光は真理のメタファーとして用いられることが通常であつて、それをイデオロギーと関係づけることは不自然である。しかし、光を真理のメタファーとして用いることは闇との対比においてのみ可能であると考えるなら、この試みも外的外れではないだろう。



言うまでもなく、光がなければものを見ることはできない。この意味で、光はものを見ることを可能にする条件である。しかし、光があたることによって、もの見え方にはある限定が課されてしまう。たとえば、私は蛍光灯の光のおかげで目のまへのコーヒークップを見ることができ、そのときコーヒークップの色合いは日光によって浮かび上がる色合いとは異なっている。光によって存在者は周囲との境目を際立たせ、独特の色合いを提示し始めるのだが、だがそれは無限にある別の色合いや境目の浮かび上がり方を排除することと等しい。したがって、光は視覚の成立の条件であると同時に視覚の制約でもある。

アルチュセールはこうした世界経験のメカニズムと類比可能なものをイデオロギーのなかに見出していると言えないだろうか。つまり、イデオロギーは人間の社会認識を可能にする条件であるが、同時にそれを制約するものとして社会認識の歪曲であるというメカニズムである。社会認識の可能性の条件が同時にその制約でもあるかぎり、イデオロギーによる汚染は不可避免的である。したがって、イデオロギーは人間と社会の媒介者であると言ふとき、人間が社会に直接に透明に関係するのを妨げる存在としてイデオロギーを表象するのは正しくない。事態はむしろ逆であると言わなければならない。人間が社会にたいして直接的に透明に関係することができないがゆえに、イデオロギーが存在しているのである。このように考えるならば、イデオロギーによる汚染は決して二次的で派生的なものではない。

### 三 他者のイデオロギーによる媒介

さて、前節の冒頭で引用したテクストが確認しているように、イデオロギーによる媒介は歴史的な様相も持っている。このイデオロギーの歴史的な様相を理論化するためにアルチュセールが導入したのは、支配的イデオロギー概念である。この概念が本格的に導入されるのは、「マルクス主義とヒューマニズム」という論文においてである。

「そこでは（階級社会では）、支配的イデオロギーは支配階級のイデオロギーである」と、アルチュセールは言う。アルチュセールが具体例として挙げているのは自由というイデオロギーである。アルチュセールによれば、自由という観念は過酷な現実、隷属状態を自由な状態であるかのように生きさせる媒体として機能した。人間はすべて自由であるという想像的な関係は、搾取と被搾取という過酷な現実的關係を包み込み、人間にこの現実的な關係を生かさせ、それを再生産することに貢献する。そして、同時に支配集団もこの神話を信じている。この神話を信じることによって、支配集団もみずからの存在条件を引き受けることになる。「支配的イデオロギーは、支配階級が被搾取階級を支配することに役立つだけではなく、支配階級に、世界とみずからとの關係を、現実的で正当化されたものとして容認させながら、みずからを支配階級として形づくることにも役立つている」<sup>(19)</sup>。このようにして、支配的イデオロギーは、社会の構成員にたいしてそれらのみずからの存在条件を引き受けるように働きかける。

支配的イデオロギーによる汚染の意味を明確にするための迂回路として、支配的イデオロギーという概念そのものが生み出す問題について確認しておくことにしよう。アルチュセールが導入した支配的イデオロギー概念は、もともとは『ドイツ・イデオロギー』におけるつぎの規定に由来する。「支配階級の思想が、どの時代においても、支配的な思想である。すなわち、社会の支配的な威力であるところの階級が、同時に、その社会の支配的な精神的な威力である」<sup>(19)</sup>。アバークロンビーらはこのような支配的イデオロギーの説明方法について、二通りの解釈が可能であると見なす。第一に、社会の知的生活が支配的イデオロギーによって支配されているので、観察者は社会のなかに被支配集団の文化を発見することができないという解釈が成立する。その理由は、被支配集団のみずからの文化に表現を与える諸制度を奪われているというものである。第二に、支配的イデオロギーによる支配とは、すべての階級がこのイデオロギーに吸収されていることを意味するものであり、よって被支配集団の文化が存在することができないという解釈が成立する。「それだから、第一の解釈においては、ひとつの社会の中に多様な諸文化が存在するのであるが、第二の解釈においては、すべての階級が参画する唯一の支配的イデオロギーだけが存在する」<sup>(20)</sup>。

アルチュセールがこの問題に自覚的であつたとは言えない。しかし、この問題に引きつけてアルチュセールの支配的イデオロギー論を読むことが可能である。アルチュセールは「異なつたイデオロギー的傾向性」<sup>(21)</sup>について語っている。イデオロギー的傾向性というのは、さまざまな集団に固有の世界表象が存在すること、つまり世界表象が集団によつて異なることを示す表現である。したがつて、アルチュセールは支配的イデオロギーに還元できないさまざまなイデオロギーの可能性に言及しているわけである。同時に、支配的イデオロギー以外のイデオロギーは従属的なイデオロギーでしかない、アルチュセールは言う。とすると、アルチュセールの支配的イデオロギー論は、第一の解釈に近いように思われる。とはいへ、第一の解釈であれ第二の解釈であれ、「なぜある集団がみずからの利害に反して他の集団のイデオロギーを受け入れるか」という問題に答えていないのであり、この点はアルチュセールの支配的イデオロギー論も例外ではない。

このような問題があるにもかかわらず、支配的イデオロギーと従属的イデオロギーの関係についてアルチュセールが述べたことは、イデオロギーによる媒介の重要な様相を明らかにしている。つまり、代理するものと代理されるものとの不一致という様相である。アルチュセールが述べた支配的イデオロギーと従属的イデオロギーの関係は、さまざまな従属的イデオロギーが存在し、それを通じて世界を解釈することが可能であるにもかかわらず、基本的に支配的イデオロギーによつて世界を解釈するほかにないという関係であつた。<sup>(22)</sup>すなわちこの関係は、他者が構築し他者に帰属する枠組みを使つてみずからの世界観や利害を自覚し表現することを強いられるという関係である。そして、言うまでもなく、他者の枠組みはみずからの世界観や利害に反する枠組みである可能性もある。アルチュセールの支配的イデオロギー論は、イデオロギーの固有の効力を発見するという意図の副産物として、〈他者のイデオロギーによる媒介〉という問題をイデオロギーの問題系に付け加えることになつたのである。

## 結語

イデオロギーが存在することは、人間と社会の透明な関係が不可能であることの証左である。そして、人間は社会的存在でありながら社会との直接的で透明な関係から疎隔されることによって、社会は人間に他者性を露呈してしまう。人間がイデオロギーの動物であるということは、イデオロギーを通じて社会の他者性が人間に刻み込まれることを意味する。そして、多くの場合にイデオロギーは他者のイデオロギーであることによって、イデオロギーを通じて二重の他者性が人間に刻み込まれるのである。

同時に、人間がイデオロギーによって他者性を刻み込まれているということは、逆にイデオロギーにも他者性が刻み込まれていることを意味する。まず、支配的イデオロギーを例にして考えてみよう。支配的イデオロギーの理想は、みずからを社会の全構成員に信じてもらうことである。しかし、この理想は、逆説的に、それを生み出す集団とは別のものに由来する不純な要素を抱え込むことによってのみ成立可能である。支配的イデオロギーは支配的な媒介物であることによって、さまざまな利害や主張を不可避的に代理してしまうからである。この水準でも、代理するものと代理されるものとの不一致を語ることができるのである。たとえば、アルチュセールのつぎのような発言は、この事態の極端な例を示している。「イデオロギーは、ある環境においては、被搾取階級の、みずからの搾取にたいする抗議の表現を生じさせる」<sup>(2)</sup>。当該の社会に対抗する主張でさえ支配的イデオロギーを通じて表現される可能性がある。そもそも従属的集団が支配的イデオロギーを受け入れるのは、支配的イデオロギー以外にはみずからの世界観や利益を語る術がないからかもしれないのである。

そうだとすれば、支配的イデオロギーは純粋ではありえず、それはつねに不純な要素や亀裂、意図されていない願望などを含んでいなければならない。ところで、イデオロギーの成立には不純物や亀裂といった汚染が必然的で

あるという事態をイデオロギーの異種混合性と呼ぶとすれば、それは支配的イデオロギーにのみ固有のことなのだろうか。あるいは、それはイデオロギーの歴史的な様相に固有であつて、歴史貫通的な様相には当てはまらないのだろうか。分裂や亀裂をはじめとした差異のない均質な社会を想定するなら、イデオロギーの歴史的様相と歴史貫通的な様相を区別することに意味があるのかもしれない。しかし、そうした想定はあまりに素朴である。

ここでも、イデオロギーによつて媒介される人間に注目して考察してみよう。社会のなかで生きるとは、定義によつて他者とともに生きることである。そして他者は、性別、年齢、宗教、民族などの多様な差異を担う存在である。そうだとするなら、そうした多様な他者を媒介するイデオロギーは、たとえそれが歴史貫通的なものであつたとしても、支配的イデオロギーと同じようにみずからうちにさまざまな亀裂や葛藤を抱え込んでいるのではないだろうか。つまりイデオロギーの異種混合性は、支配的イデオロギーのみならずイデオロギーそのものの規定と考へることができないのではないだろうか。

アルチュセールのイデオロギー論を人間論的に読み直すことが、イデオロギーへの問いをこのように変換することに通ずることを確認して、本稿を閉じることになしたい。

## 〔注〕

- (1) Althusser, L., 'Idéologie et appareils idéologiques d'Etat,' *Positions*, Editions sociales 1976, p. 123 (L・アルチュセール「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」柳内隆訳、『アルチュセールのイデオロギー論』三光社、一九九三年、所収、八二頁)。以下、IAIEと略記する。
- (2) イデオロギーの概念史、および問題群については以下を参照。Eagleton, T., *Ideology: an introduction*, Verso 1991. (T・イーグルトン「イデオロギーとは何か」大橋洋一訳、平凡社、一九九六年)。
- (3) Althusser, L., *Pour Marx (avec Avant-propos de Balibar, E.)*, La Découverte 1996, p. 111. (L・アルチュセール『マルクスのために』河野健二・田村徹・西川長夫訳、平凡社、一九九四年、一一〇頁)。以下、PMと略記する。

- (4) PM, p. 111. (邦訳「一八二頁」)。
- (5) Althusser, L., et al., *Lire le Capital*, P. U. F. 1996, 280f. (今村仁司訳『資本論を読む』(中)「ちくま学芸文庫」一九九六年「六五—六六頁」)。
- (6) PM, p. 113. (邦訳「一八四—一八五頁」)。以上のアルチュセールの明言にもかかわらず、一部の論者は、上部構造に相対的自律性という性格を追加するだけでは不十分であるという批判を行っている。ポスト・マルクス主義を標榜するラクラウとムフは以下のように言っている。「経済がどんなタイプの社会においても最終審級で決定しうるのであれば、それは、少なくともこの最終審級との関連では、我々の直面しているのが重層的決定ではなく単なる決定であることを意味している。社会が自らの運動法則を決定する最終審級を持つているなら、重層的に決定された諸審級と最終審級との関係は、後者による単純で一方的な決定として理解されなければならない」。Cf. E. Laclau, & Ch. Mouffe, *Hegemony and Socialist Strategy*, Verso 1993, p. 99. (山崎カラル・石澤武訳『ポスト・マルクス主義と政治』大村書店「一九九二年」一六〇—一六一頁)。
- (7) Althusser, *Lire le Capital*, p. 389. (邦訳「二二二頁」)。
- (8) PM, p. 238. (邦訳「四二二頁」)。
- (9) PM, p. 239. (邦訳「四二三頁」)。
- (10) IAIE, p. 114. (邦訳「一八二頁」)。
- (11) Althusser, L., 'Théorie, pratique théorique et formation théorique. Idéologie et lutte idéologique,' *Texte ronéotypé* 1965. 本稿は以下の英訳を用いる。Althusser, L., 'Theory, Theoretical Practice and Theoretical Formation: Ideology and Ideological Struggle,' trans. Kavanagh, J. H., *Philosophy and the Spontaneous Philosophy of the Scientists & Other Essays*, Verso 1990, p. 28-29. 以下「TPTF」と略記する。
- (12) 筆者は虚偽がイデオロギーを構成する必要不可欠な要因では必ずしもないという立場に立っている。もちろん、イデオロギーが虚偽であることは十分可能であるが、拙稿を参照。「イデオロギーと虚偽」、『中央学院大学社会システム研究所紀要』第4巻第2号「二〇〇四年三月」一三三—一三五頁。
- (13) TPTF, p. 29.
- (14) W・リップマン『世論』(上)掛川トミ子訳、岩波文庫、一九八七年、三〇頁。

- (15) PM., p. 242. (邦訳「四一八頁」)。  
 (16) TTPPTF., p. 28.  
 (17) PM., p. 241. (邦訳「四一六頁」)。  
 (18) PM., p. 242. (邦訳「四一八頁」)  
 (19) Marx, K., & Engels, F., *Die Deutsche Ideologie*, hrsg. von Hiromatsu, W., Kawadeshobo-shinsha Vlg. Tokyo 1974, S. 64.  
 (20) Abercrombie, A., & Hill, S., & Turner, B. S., *The Dominant Ideology Thesis*, George Allen & Unwin Ltd. 1980, p. 8.  
 (21) TTPPTF., p. 30.  
 (22) こうした事態は、身近な場面で経験可能である。ニュース番組で見られる街頭インタビューの凡庸さを思い出してほしい。多くの人は、誰か他人が語った紋切り型のコメントを繰り返すにすぎない。大衆社会を批判する根拠としてこの現実を利用することは容易い。しかし、誰でもがみずからの利害を正確に表現できる語彙、文法、パースペクティブを有しているわけではない。誰かの言葉を通して、社会とのつながりを見出すほかない場合が常態であろう。そうであるからこそ、そうしたステレオタイプによって何が伝えられようとしているのかに敏感にならなければならない。
- (23) TTPPTF., p. 30.

〔付記〕本稿は、平成一六年度文部科学省科学研究費補助金(若手研究(B)・課題番号16720006)による研究成果の一部である。